

高速実験炉「常陽」性能試験報告書

魔方ス濃度測定試験(PT-53)

(1978年4月～8月)

1979年10月

動力炉・核燃料開発事業団

1979年10月

高速実験炉「常陽」性能試験報告書

廃ガス濃度測定試験 (PT-53)

(1978年4月~8月)

○中島裕治, **根本勉雄, *遠藤清志
 引地惠義, **安哲雄, ***庄頴正史
 今泉英之, ***田村政昭, ***櫻久保稔
 三輪秀泰, ***

複製又はこの資料の入手については、下記にお問い合わせ下さい。

〒311-13 茨城県東茨城郡大洗町成田町4002
 動力炉・核燃料開発事業団 大洗工学センター
 システム開発推進部 技術管理室

Inquiries about copyright and reproduction should be addressed to:

Technology Management Section, O-arai Engineering Center, Power Reactor
 and Nuclear Fuel Development Corporation 4002, Narita O-arai-machi Higashii-
 baraki-gun, Ibaraki, 311-14, Japan

出力上昇試験期間中に、アルゴンおよび塩素ガスを捕集容器にサンプリングして、廃ガスに含まれる放射性ガスの核種分析・濃度測定を、多重高分析装置 (MCA)・振動容皿電位計 (VRE) で行った。

MCA で得られた γ 線スペクトルでは、 ^{41}Ar ($T_{1/2} = 1.83\text{ hr}$, $E_\gamma = 1.29\text{ MeV}$, $E_\beta = 1.20\text{ MeV}$) のみが確認され、VRE による減衰特性の結果では、 ^{41}Ar の他に長半減期核種の存在も確認された。長半減期核種については、試料の分析（最確法ナビゲーション）により ^3H ($T_{1/2} = 12.36\text{ y}$, $E_\beta = 0.018\text{ MeV}$) が一部混入していることが判明し、さらには諸々の条件下により ^{14}C ($T_{1/2} = 57.30\text{ y}$, $E_\beta = 0.156\text{ MeV}$) が推定された。

以上の核種分析の結果に基づいて廃ガス試料の濃度を評価したが、原子炉出力との相関は不明確であった。全体の傾向としては、長半減期核種の濃度 ($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$) が、出力上昇試験期間中に 10^{-5} から 10^{-4} オーダーに 1 行程度増加し、アルゴンおよび塩素系から、各々 ^3H , ^{41}Ar が支配的に廃ガス処理系へ到達していることが認められた。

本試験では、核種の同定が不完全で廃ガスデータについての十分な解析結果が得られていないが、今後は実績をふまえて、プラント状態に合致させたサンプリング、連続測定の方法の検討、 ^3H , ^{14}C の定性・定量分析の可能な測定方法の導入、および廃ガス発生源の放射性ガスの核種・濃度・発生量などに関する試験の充実により総合的な解析・評価を進めること。

尚、試験期間中の廃ガスの濃度・放出率は、暫理基準値を十分に満足していた。

* 大洗工学センター 安全管理部放射性物質処理課第2係
 ** 同 上 高速実験炉運転技術開発プラント Gr
 *** 同 上 原子力第1課第4Gr

Oct., 1979

"Jōyō" Start-Up Test Report

Measurement of Radioactive Waste Gas

* Yuji Nakashima*, Norio Nemoto*,
 Kiyoshi Endo*, Takayoshi Hikichi**,
 Tetsunori Yasu**, Tadashi Hirose**,
 Hideyuki Inazumi**, Masaki Tamura***,
 Minoru Kashikubo*** and Hideyasu Niwa***

Abstract

A radionuclide-analysis and a determination of activity of the waste argon and nitrogen gas were carried out during the power ascension test. The sampling of the gas was carried out by means of stainless steel vacuum vessels or vinyl bags and gamma activities were analyzed with a multi channel pulse height analyzer (MCA) and a vibrating reed electrometer (VRE).

^{41}Ar was observed as the major part of gamma activity. In addition to ^{41}Ar , some long-lived radionuclides were observed in the decay measurement with VRE. Concerning long-lived radionuclides, it was confirmed that some amounts of ^3H existed as a part of activity and some amounts of ^{14}C were considered to be in the waste gas by judging several characteristic informations of the gas. The concentration of radionuclides in the waste gas were also evaluated. No relationship between the concentrations and a reactor power were found. Above results, however, indicated such general tendency that the concentration of this long-lived radionuclides released from the argon and nitrogen waste gas are ^3H and ^{41}Ar . The values of concentrations of the radionuclides and release rates of the waste gas were well below the control criteria in this test period.

<目次>

1. まえがき	1
2. 放ガス処理系設備概要	3
2.1 アルゴン放ガス処理系概要	3
2.2 硝素放ガス処理系概要	3
2.3 サンプリングボックス概要	3
3. 試験の方法	6
3.1 放ガス核種分析	6
3.2 放ガス濃度測定	7
4. 試験結果	11
4.1 サンプリング条件	11
4.2 放ガス核種分析	12
4.3 放ガス濃度測定	20
5. 備 計	25
5.1 管理基準値について	25
5.2 基礎データについて	25
6. 結 言	27
添付データ	28
参考資料	32

* Radiation Control Section, Health and Safety Division, O-arai Engineering Center, PNC.

** Reactor Technology Section, Experimental Fast Reactor Division, do.

*** Operation Section, Experimental Fast Reactor Division, do.

図表目次

表1.1 平常運転時の予想される気体廃棄物	1
図2.1 廃ガス処理系フローシート	4
図2.2 廃ガスサンプリング系統フローシート	5
図3.1 ガス採取バッグ	6
図3.2 廃ガス核種分析プロックダイヤグラム	6
図3.3 ガス捕集用電離箱	7
図3.4 廃ガス濃度測定プロックダイヤグラム	7
図3.5 ～ 3.7 表通なし	9
図4.1 予定と実績	11
表4.1 廃ガス試料γ線スペクトル	12
表4.2 廃ガス試料減衰特性	12
図4.2 9MWt 時廃ガス試料γ線スペクトル	13
図4.3 15MWt 時廃ガス試料γ線スペクトル	14
図4.4 50MWt 時廃ガス試料γ線スペクトル （サンプリング直後測定）	15
図4.5 50MWt 時廃ガス試料γ線スペクトル （サンプリング約20時間後測定）	16
図4.6 (9MWt 時) 廃ガス試料減衰特性<Type-a>	17
図4.7 (9MWt 時) 廃ガス試料減衰特性<Type-b>	18
図4.8 (燃交モード) 廃ガス試料減衰特性<Type-c>	19
表4.3 ^{14}C の濃度算出結果	21
表4.4 ^3H と ^{14}C の量在比(%)	21
表4.5 廃ガス試料濃度測定結果	22
図4.9-(1), (2) 廃ガス濃度測定結果	23
図5.1 ～ 5.3 廃ガス処理系ガスモニタ指示記録	29

List of Tables

List of Figure

1. まえがき

Fig. 2.1 Schematic flow diagram of the waste gas treatment system.

Fig. 2.2 Schematic flow diagram of the waste gas sampling system.

Fig. 3.1 Vinyl bag for sampling.

Fig. 3.2 Schematic block diagram of the multi channel pulse height analyzer for gamma-ray spectrum.

Fig. 3.3 Stainless steel vacuum vessel for sampling.

Fig. 3.4 Schematic block diagram of the vibrating reed electrometer for total activity.

Fig. 3.5 ~ 3.7 No title.

Fig. 4.1 Schedule and accomplishment of waste gas sampling.

Fig. 4.2 Gamma-ray spectrum of the waste gas at 9 Mwt power operation.

Fig. 4.3 Gamma-ray spectrum of the waste gas at 15 Mwt power operation. (directly after sampling)

Fig. 4.4 Gamma-ray spectrum of the waste gas at 50 Mwt power operation. (at about 20 hours after sampling)

Fig. 4.5 Gamma-ray spectrum of the waste gas at 50 Mwt power operation. (at about 20 hours after sampling)

Fig. 4.6 Decay characteristic of the waste gas at 9 Mwt. (Type-a)

Fig. 4.7 Decay characteristic of the waste gas at 9 Mwt. (Type-b)

Fig. 4.8 Decay characteristic of the waste gas at refueling period. (Type-c)

Fig. 4.9-(1) Waste gas activity depending on reactor power.

Fig. 4.9-(2) Waste gas activity depending on reactor integrated power.

Fig. 5.1 ~ 5.3 Variation of waste gas activity measured by gas monitor. (1) ~ (3)

「常陽」から排出される放射性気体廃棄物は、一次カバーガス系、燃料交換機等の燃料取扱系から排出されるアルゴンガス、および一次容器ガス予熱系・安全容器取扱系から排出される空素焼がスが主要である。気体焼却物の平常運転時に予想される核種・量・放出率は、表 1.1(a)～(f)に示すとおりであり、着目する核種は⁴¹Ar, ³H, ¹⁴C と考えられる。ただし、⁴¹Ar は、半減期が短く、発生源から廃ガス処理設備に到達するまでの時間が相当長いので、排出されるまでに十分減衰する。また、³H, ¹⁴C は半減期が長いので、運転歴を蓄積していないと、放射能量は増加しない。

そこで、これらの廃ガスについて、管理基準値との比較、高炉における廃ガスの基礎データの収集などを目的に、各出力毎のサンプリングにより核種分析および濃度評価を行った。

表 1.1 平常運転時の予想される気体廃棄物

表 1.1 平常運転時の予想される気体廃棄物 (出典: 製造実験報告書「常陽」運転マニュアル参考資料) p. 41 ~ 43			
核種	半減期	単位時間当たり生成量 (Ci/sec)	排气路先端放出量 (Ci/sec)
⁴¹ Ar	110 min	0.77 × 10 ⁻³	3 × 10 ⁻⁷ Ci/sec

*1: 主に一次カバーガス循環で生成。⁴⁰Ar(n, r) ⁴¹Ar

(b) ナトリウム炉の不純物ランによる核分裂生成物

核種	半減期	単位時間当たりの生成量 (Ci/sec)	Na中の不純物ランによるもののかくはん率 (Ci/sec)	廃ガス系への放出率 (Ci/sec)
Kr	83 m	144 m	2.85 × 10 ⁻³	5.99 × 10 ⁻¹¹
Kr	85 m	4.36 h	1.98	1.57 × 10 ⁻¹²
Kr	85	10.27 y	1.00 × 10 ⁻⁵	8.55 × 10 ⁻⁹
Kr	87	78 m	8.00 × 10 ²	2.10 × 10 ⁻¹³
Kr	88	2.77 h	5.4 × 10 ²	7.90 × 10 ⁻⁸
Kr	89	3.18 m	3.15 × 10 ³	9.28 × 10 ⁻⁷
Xe	131 m	12.0 d	1.05 × 10 ⁻⁸	0.0
Xe	133 m	2.3 d	9.75 × 10 ⁻⁴	2.16 × 10 ⁻¹⁶
Xe	133	5.3 d	1.90 × 10 ⁻²	1.81 × 10 ⁻¹¹
Xe	135 m	15.6 d	4.40 × 10 ⁻¹	3.78 × 10 ⁻¹⁰
Xe	135	9.1 h	4.18	9.24 × 10 ⁻⁹
Xe	137	3.9 m	4.70 × 10 ³	8.77 × 10 ⁻⁸
Xe	138	17 m	1.18 × 10 ³	9.87 × 10 ⁻⁵
I	131	8.1 m	4.23 × 10 ⁻²	2.47 × 10 ⁻⁶
I	132	2.4 h	1.14 × 10 ¹	8.87 × 10 ⁻¹³
I	133	20.8 h	6.45	2.40 × 10 ⁻¹⁰
I	134	52.5 m	1.88 × 10 ²	1.11 × 10 ⁻¹¹
I	135	6.7 h	4.18 × 10 ⁰	9.68 × 10 ⁻¹¹
			8.77 × 10 ⁻¹⁰	1.42 × 10 ⁻¹²
				3.10 × 10 ⁻¹⁰

(c) 放射化ナトリウム

核種	半減期	ナトリウム蒸気による放射能強度 (μCi)	カーボンガスからの放出率 ($\mu\text{Ci/sec}$)
^{22}Na	2.58 y	5.2×10^{-6}	8.7×10^{-11}
^{24}Na	15.1 h	1.42×10^{-2}	2.4×10^{-7}

*2 : ナトリウム温度 435 ℃での飽和蒸気(1:0.001 atm)より求めた。

(d) トリチウム

核種	半減期	相対時間当たり生成量 (Ci/sec)	放出率 (Ci/sec)
^3H	12.26 y	3×10^{-8}	3×10^{-9}

*3 : Tritium fission, 制御棒・調整棒に含まれる $^{6,7}\text{Li}$, $^{10,11}\text{B}$ から生成

(e) 硝素ガス

核種	半減期	放射能量及び放出量	
		10年間照射で $4.5 \times 10^{-8} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$	放出放射能として 無視し得る。
^{14}C	5568 y	—	—
^{16}N	7.35 s	—	—

*4 : $^{14}\text{N}(\text{n}, \text{p})^{14}\text{C}$, $^{15}\text{N}(\text{n}, \gamma)^{14}\text{N}$ の反応で生成

(f) 燃料被覆層における核分裂生成物の放出量(2%破損想定)

核種	半減期	相対時間当たり生成量の2% 相当放出時の 生成量 (Ci/sec)	硝ガスへの 放出率 (Ci/sec)	14日間照射へ 送入した際の 放射能 (Ci)	14日間照射へ 送入した際の 放射能 (Ci)	タンクへ貯留 した場合の放 射能 (Ci/sec)
Kr 83m	11.4 m	2.85×10^{-3}	5.7×10^{-5}	1.50×10^{-6}	1.48×10^{-2}	0.0
Kr 85m	4.36h	1.98	3.96×10^{-2}	8.16×10^{-3}	1.86×10^2	0.0
Kr 85	10.27y	1.0×10^{-5}	2.00×10^{-7}	2.00×10^{-7}	2.13×10	$2.13 \times 10 \times 10^{-5}$
Kr 87	78 m	8.0×10^2	1.60×10^1	7.52×10^{-2}	5.08×10^2	0.0
Kr 88	2.77h	5.4×10^2	1.08×10^1	8.87×10^{-1}	1.28×10^4	0.0
Kr 89	3.18m	3.15×10^3	6.30×10^1	0.0	0.0	0.0
Xe 31m	12.0 d	1.05×10^{-8}	2.10×10^{-10}	2.05×10^{-10}	1.70×10^{-4}	8.05×10^{-5}
Xe 31m	2.3 d	9.75×10^{-4}	1.95×10^{-6}	1.72×10^{-5}	4.84	9.51×10^{-2}
Xe 33	5.3 d	1.90×10^{-2}	3.80×10^{-4}	3.60×10^{-4}	1.99×10^2	3.60×10^1
Xe 35m	15.6 d	4.40×10^{-1}	8.8×10^{-3}	0.0	0.0	0.0
Xe 35	9.1 h	4.18	8.36×10^{-2}	3.91×10^{-2}	1.85×10^3	0.0
Xe 37	3.9 m	4.70×10^3	9.40×10^1	0.0	0.0	0.0
Xe 38	17 m	1.18×10^3	2.36×10^4	0.0	0.0	1.56×10^{-7}
I 131	8.1 d	4.23×10^{-2}	8.46×10^{-7}	8.16×10^{-7}	5.75×10^{-1}	1.89×10^{-1}
I 132	2.4 h	1.14×10	2.28×10^{-4}	1.06×10^{-5}	1.24×10^{-1}	0.0
I 133	20.8 h	$6.45 \times$	1.29×10^{-4}	9.25×10^{-5}	1.00×10	0.0
I 134	52.5 m	1.83×10^2	3.66×10^{-3}	1.35×10^{-6}	6.14×10^{-3}	0.0
I 135	6.7 h	4.18×10	8.36×10^{-4}	2.95×10^{-4}	1.02×10	0.0

2. 廃ガス処理系設備概要

アルゴン廃ガス処理系に流入する廃ガスは廃ガスヘッダに集められ、次いで廃ガスクーラーで冷却される。廃ガスはフレイルタ通過後、放射性ガスマニホールによりモニタリングされ、放射性物質濃度が規定濃度($0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)以下の場合、廃ガスタンクをバイパスして廃ガスピストフィルタを経て排気筒から放出される。また、廃ガスの放射生物量が $0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ 以上の場合、廃ガスタンクから圧縮貯留され、廃ガスのサンプリング測定および通報モニタリングにより放射性物質濃度が放出基準(61.5 Ci/day)以下で放出できることが確認された場合のみ行われる。

注-1) 「原子炉施設保安規定 参考資料(S-50.4)」を参照】

アルゴン廃ガス処理系の概略フローチートを図2.1に示す。
廃ガス処理系に流入する廃ガスは、まず窒素ガスクーラーにより冷却される。次にフィルターで浄過され、窒素ガス中に含まれる粒状物質が除去された後、系内の放射性物質濃度が規定濃度($0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)以下の場合、プロアにより排気筒から大気へ放出される。
また、廃ガスの放射性物質濃度が $0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ 以上の場合には、アルゴン廃ガス処理系へ送り処理される。

2.2 窒素廃ガス処理系概要

窒素廃ガス処理系に流入する廃ガスは、まず窒素ガスクーラーにより冷却される。次にフィルターで浄過され、窒素ガス中に含まれる粒状物質が除去された後、系内の放射性物質濃度が規定濃度($0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)以下の場合、プロアにより排気筒から大気へ放出される。
また、廃ガスの放射性物質濃度が $0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ 以上の場合には、アルゴン廃ガス処理系へ送り処理される。

2.3 サンプリングボックス概要

廃ガスサンプリングシステムのフローシートを図2.2に示す。
本サンプリングボックスは廃ガスタンクおよび廃ガス処理系ラインからの配管が集中されており、バルブ操作によって任意のタンクまたはラインの廃ガスをサンプリングできるようになっている。サンプリングボックスの形状はグローブボックス型であり、廃ガスをサンプリングするための捕集容器はボックス内に入れて、グローブボックスの気密性を保持した状態でサンプリングすることができる。

ボックスには真空ポンプが備えてあり、タンクおよびラインからの廃ガスをサンプリングする時サンプリングライン内のガスを充分に置換させてから行う。

注-2) 窒素廃ガス処理系のサンプリングラインは設備として不備の為、本試験期間中は使用せず。
試験終了後、改造予定。(S-53.10より使用可能)

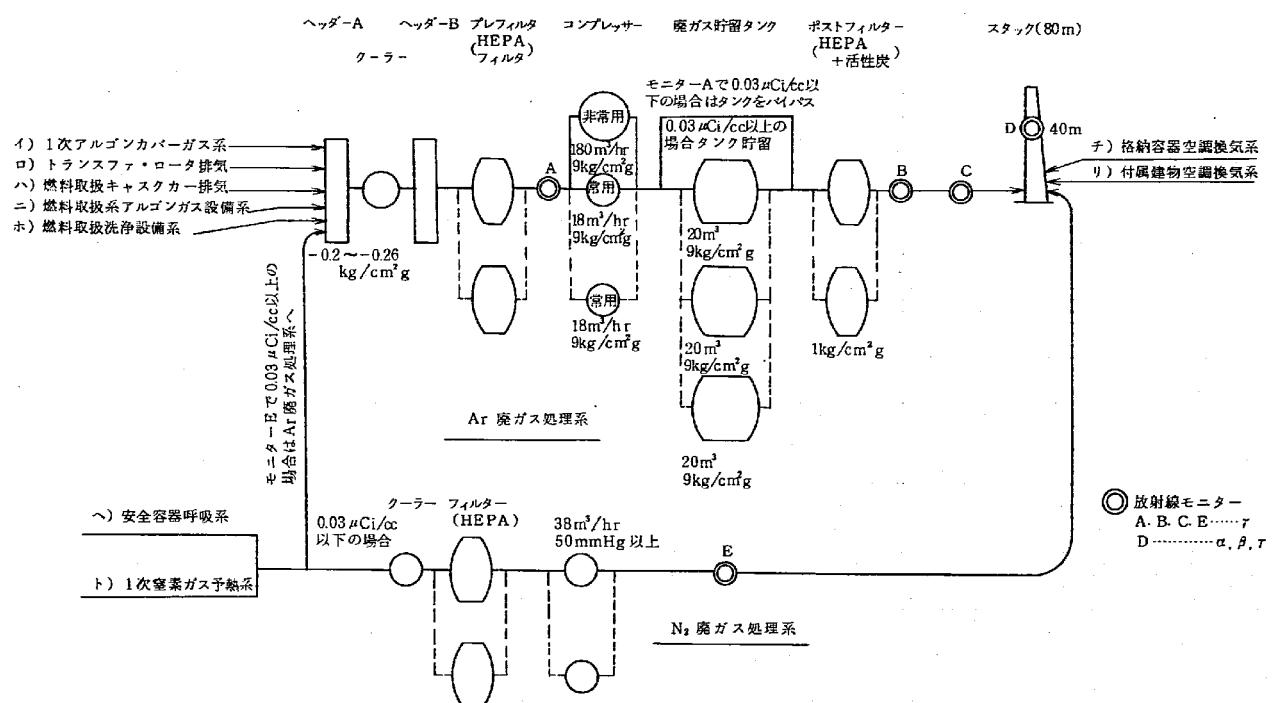


図 2.1 廃ガス処理系フローシート

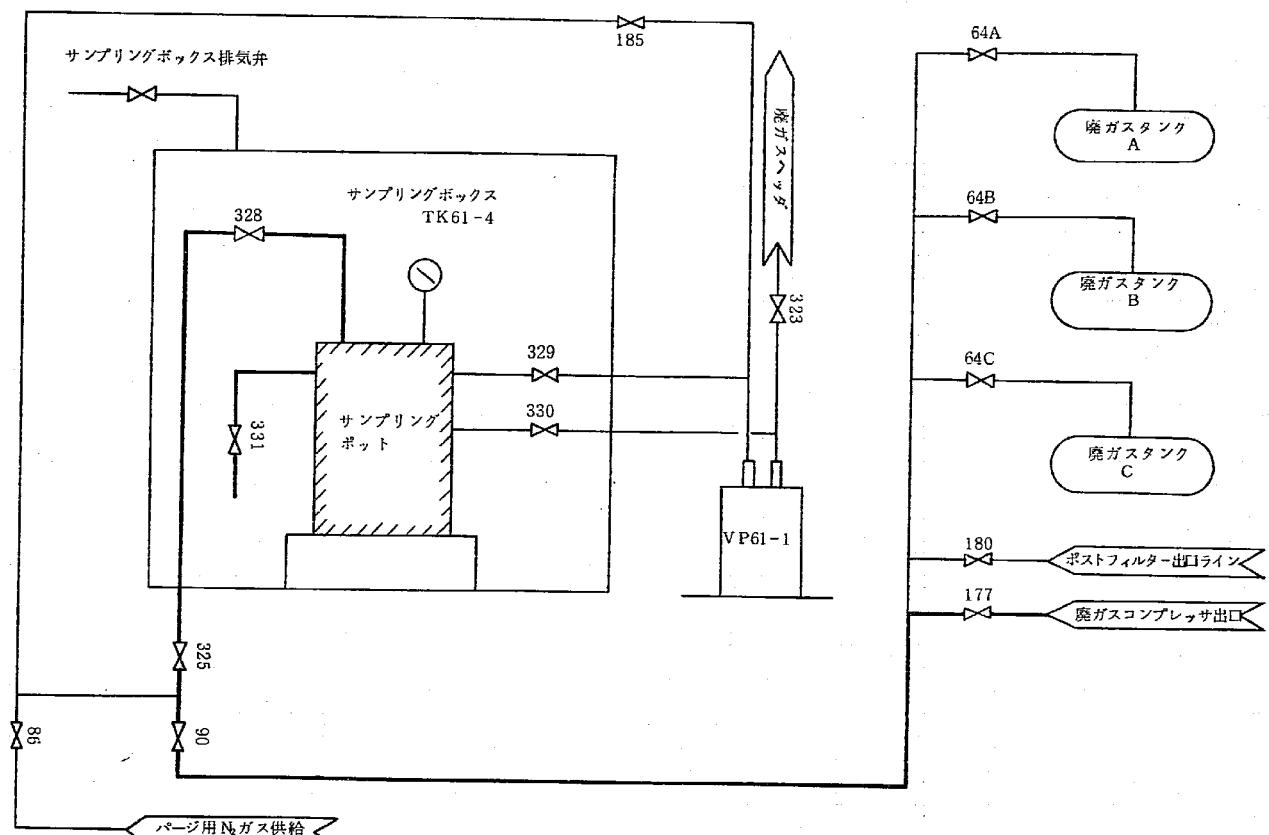


図 2.2 廃ガスサンプリング系統フローシート

3. 試験の方法

廃ガス核種分析と廃ガス濃度測定について、各々サンプリング方法、測定方法、解析方法の順に以下に示す。

3.1. 廃ガス核種分析

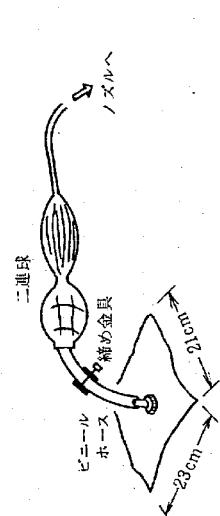
(1) サンプリング方法

図2.2のサンプリングノズルに二連球を取付けたガス採取バッグ(以下「バッグ」)…図3.1参照)を接続し、手動で廃ガスをサンプリングする。

採取後は、内部の試料ガスが漏れないように、締め金具で、ホースを締めつける。

材質：硬質ビニール
容積：約2,500cm³
備考：環境公害用

図3.1 ガス採取 バッグ



(2) 測定方法

廃ガスをサンプリングした1.5ℓタンクを振動容積電位計(以下「VRE」)に装着し、主にチエンバ内の放射性ガスのα線、β線による電離电流を測定する。

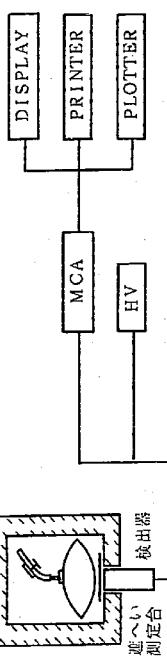


図3.4 廃ガス濃度測定プロックダイヤグラム

一般に電離电流と濃度C(μCi/cm³)の関係は次式による。

$$C = \frac{W \times I}{V \times (3.7 \times 10^4) \times E \times 10^6 \times (1.6 \times 10^{-19}) \times 7}$$

$$= 3.8 \times 10^6 \frac{I}{E \gamma} (\mu\text{Ci}/\text{cm}^3)$$

(3-1)

(3) 解析方法

MCAで得られた廃ガス試料のγ線スペクトルにより、試料に含まれるγ線放出核種のγ線エネルギーを決定し、表1.1に示したγ線核種を考慮して、該当核種を同定する。

3.2. 廃ガス濃度測定

(1) サンプリング方法

図2.2のサンプリングノズルで、あらかじめ真空状態にしたガス捕集用電離箱(以下「1.5ℓチエンバ」)を接続し、付属のバルブの開閉により廃ガスをサンプリングする。なお、サンプリング時には、1.5ℓチエンバ内が大気圧と等しくなるように注意する。

材質：ステンレス製

容積：1,500cm³(標準状態)

備考：バルブ2ヶ付属

+ 3kg/cm²まで使用可能

図2.2 ガス捕集用電離箱

(2) 測定方法

廃ガスをサンプリングした1.5ℓチエンバを振動容積電位計(以下「VRE」)に装着し、主にチエンバ内の放射性ガスのα線、β線による電離电流を測定する。

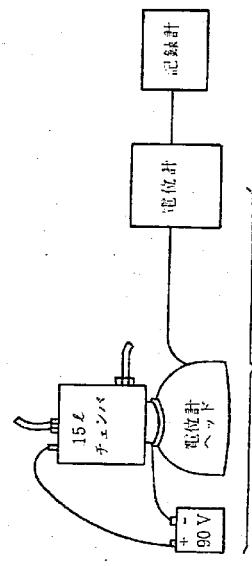


図3.3 ガス捕集用電離箱

3.3. 放射性ガス濃度測定

ここで、

$$C = \frac{\int_{\gamma} G}{V}$$

$G = \text{放射性ガス濃度 } (\mu\text{Ci}/\text{cm}^3)$

$V = \text{電離箱容積 } (\text{cm}^3)$

$$\left| \begin{array}{l} E = \text{平均エネルギー} (\text{MeV}) \\ I = \text{電離電流} (\text{Amp}) \\ \gamma = \text{電離効率} \\ W = 1 \text{ケのイオンを作るのに要するエネルギー} \\ (\beta\text{線に対するエネルギー}) \end{array} \right| \quad \left| \begin{array}{l} \beta\text{線に対する} E = 0.33E_{\max}(1 - \frac{Z}{50})(1 + \frac{E_{\max}}{4}) \\ (\text{一般に} E = 0.33E_{\max} \text{としてよい。}) \end{array} \right.$$

電離箱の電離効率 γ は、 β 線の平均エネルギー E に反比例する。したがって E/γ の値は一定になるので、一般に β 線に対する ${}^3\text{H}$ を除いて同一の計算式によつて濃度を求めてよい。

一般的の β 線に対するは、(3-1) 式に E/γ の値を代入すると、次のようになる。

$$C = 1.6 \times 10^8 I \quad (3-2)$$

${}^3\text{H}$ に対しては、同様に

$$C = 1.1 \times 10^9 I \quad (3-3)$$

注-3) 応用物理32巻(1963) $E\gamma = 2.4 \times 10^{-2}$

以上の関係を用いたVREによる濃度測定は、次の2つの方法があり、通常は、「(1) 高抵抗で測定した場合」の方法を用いている。

この方法を用いた場合の検出感度は、 ${}^3\text{H}$ に対して $\sim 2 \times 10^{-6} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ 、一般的 β 線に対して $\sim 1 \times 10^{-6} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ としている。

1) 高抵抗端子で測定した場合

一般的 β 核種に対しては、

$$C = 1.6 \times 10^6 \frac{V}{R} \quad (3-4)$$

トリチウムに対しては

$$C = 1.1 \times 10^6 \frac{V}{R} \quad (3-5)$$

ただし、 $(V = \text{電位計の読み取り}, R = \text{測定に使用した抵抗値} (\Omega))$

注-4) 測定効率は65%としている。

注-5) 管理上のバックグラウンド約5mV ($R = 10^{12} \Omega$) を差引いた正味値

ii) オープン端子で測定する場合(電荷計法)

一般的 β 核種に対しては、

$$C = 1.6 \times 10^{-6} \frac{dV}{dt} \quad (3-6)$$

10⁻¹³ A以下の微少電流を測定する場合はオーブン端子を使用する。

また、試料の放射性ガス濃度 C は次式による。

$$C = 1.6 \times 10^6 \times \frac{V_0}{R} \quad (3-9)$$

ここで、 $(C = \text{放射性ガス濃度} (\mu\text{Ci}/\text{cm}^3))$

$V_0 = \text{試料採取時ににおけるVREの正味指示値 (mV)}$

尚、 V_0 は、次式による時間補正を行ふ求めめる。

$$V_1 = V_0 \exp (-0.693t_1 / T_{1/2}) \quad (3-10)$$

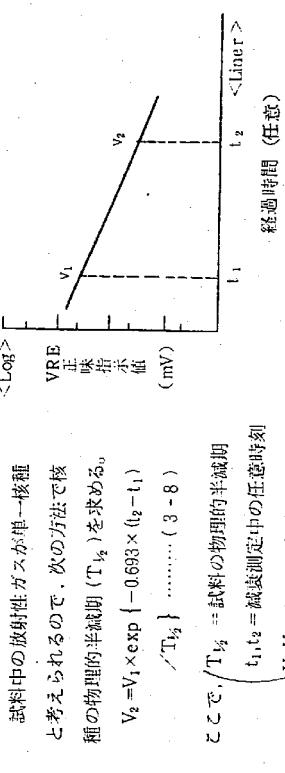


図 3.5

ii) 碱度が途中で飽和する場合
試料中に短半減期と長半減期の放射性ガスが混在していると考えられるので、長半減期成分の指示値 (V_L) を差引き、図 3.6 の破線に i) の方法を適用し、試料中の短半減期核種の物理的半減期と濃度を算出する。

また、長半減期核種についての物理的半減期はこの場合求めらず、核種は同定できない。更に、長半減期分の指示値も、核種が單一か、混在か、また、 ^3H の存在の有無によって、濃度への換算が異なるので、参考値として取扱う。

iii) 碱度が最初から飽和している場合(減衰しない場合)

試料は、長半減期核種が單一または混在と考えられるが、それ以上の解析はできない。指示値の取扱いは、ii) と同様。

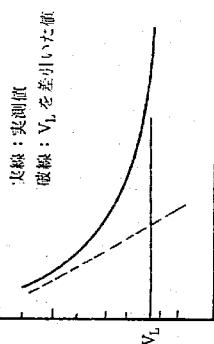


図 3.6.

4. 試験結果

各出力でサンプリングした魔ガス試料の核種分析、濃度測定の結果を下表に示す。

4.1. サンプリング条件

試験の予定と実績を図 4.1 に示す。

試験の実施率は 90 %以上で立合検査も含め合計 13 ケース (1.5 チルシバ約 20 本、パック 13 箇) の魔ガスサンプリングを行った。

この期間の原子炉出力の推移は図のとおりで、原子炉が試験運転の為、頻繁に原子炉出力が変化しているが、魔ガスサンプリングは全体として、起動前・運転中・停止後を、また、各運転出力では連續運転の末期をねらって実施した。

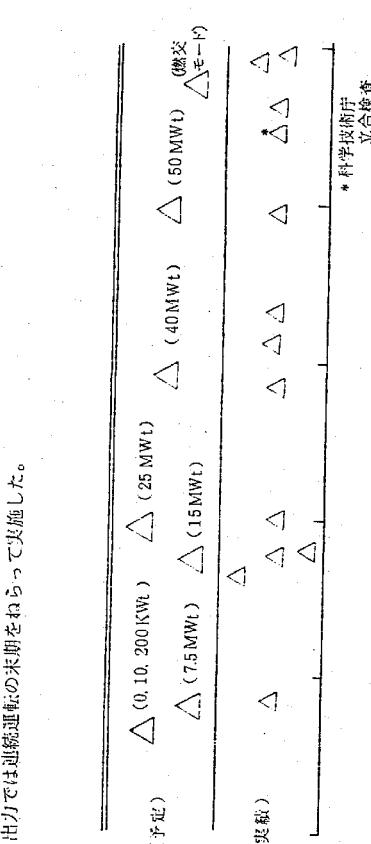
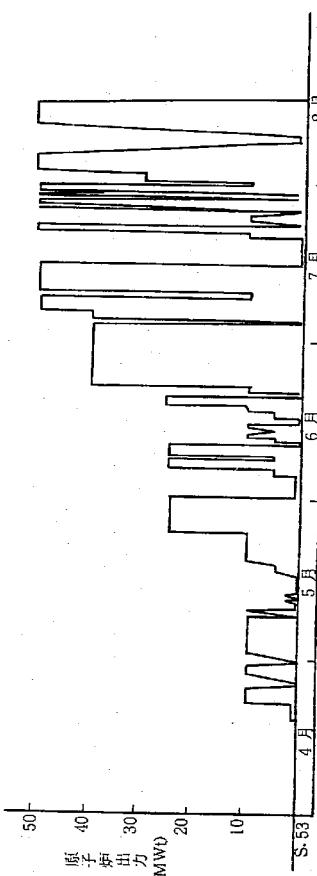


図 4.1 予定と実績



4.2. 廃ガス核種分析

多重波高分析装置でベックを測定して得られた γ 線スペクトルと、振動容断電位計セットで 1.5MeV を測定して得られた減衰特性の結果を異なるタイプに分類すると次のようになる。

(1) γ 線スペクトル

代表的なタイプを下表に示す。

表 4.1 廃ガス試料 γ 線スペクトル

タイプ	スペクトル	カース*	備考
1	^{41}Ar の1.29 MeVのビーカーを6つ	2	図 4.2 参照
2	バックグラウンドスペクトルと同じ	11	図 4.3 参照

* 図 4.1 での実験を 13 ケースとする。

Type-1に該当する廃ガス試料においては、 ^{41}Ar 以外の核種は全く検出されず（図 4.4 参照）、 $\text{Ar}-41$ が減衰した後にも同様であった（図 4.5 参照）。

(2) 減衰特性

代表的なタイプを下表に示す。

表 4.2 廃ガス試料減衰特性

タイプ	確認された核種	回数	備考
a	^{41}Ar ($T_{1/2} = 1.83\text{h}$)のみ	1	図 4.6 参照
b	^{41}Ar と長半減期核種*	3	図 4.7 参照
c	長半減期核種のみ	16	図 4.8 参照
d	なし	3	

* 廃ガスの分析により、 ^{3}H が確認されている。
しかしながら、VREから算出した濃度 ($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$) と分析データが一致しないことなどから、他の長半減期核種 (ex. ^{14}C) の混在も推定される。(添付データ-1参照)

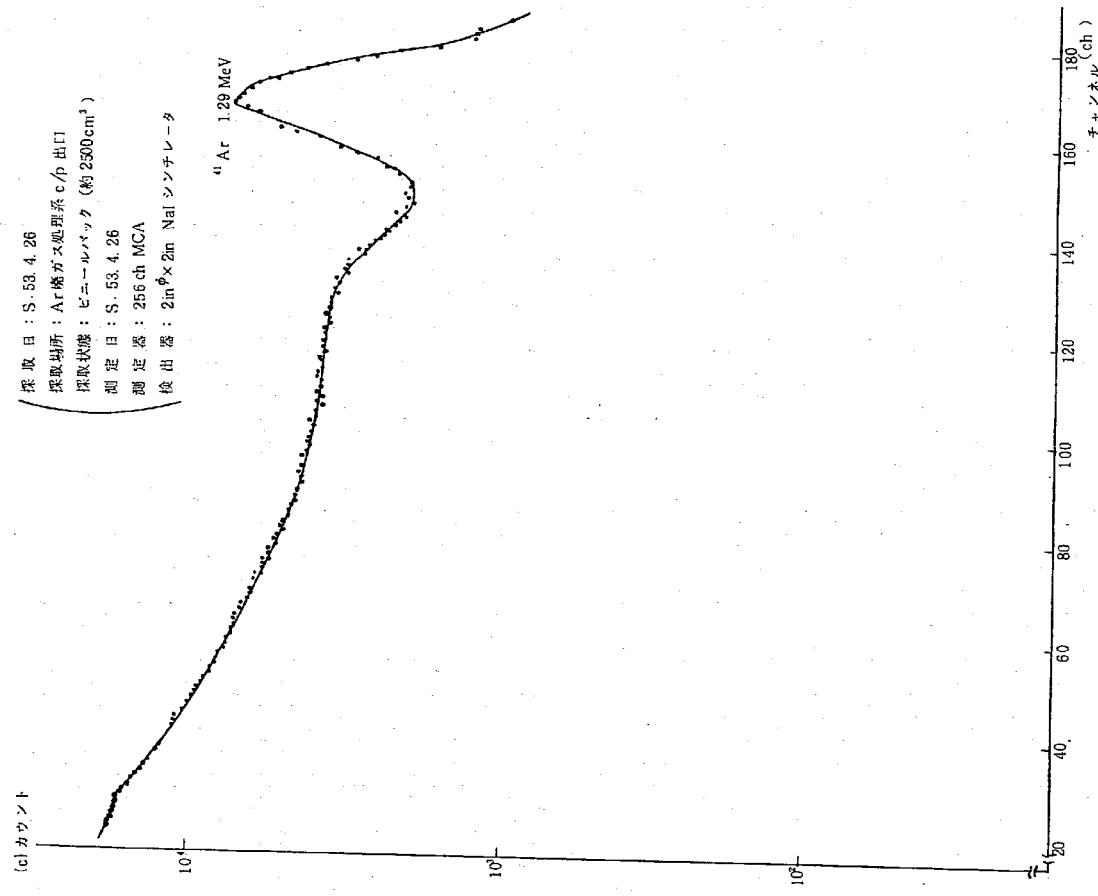


図 4.1 9 MWt 時磨ガス試料 γ 線スペクトル



図 4.2 9 MWt 時磨ガス試料 γ 線スペクトル

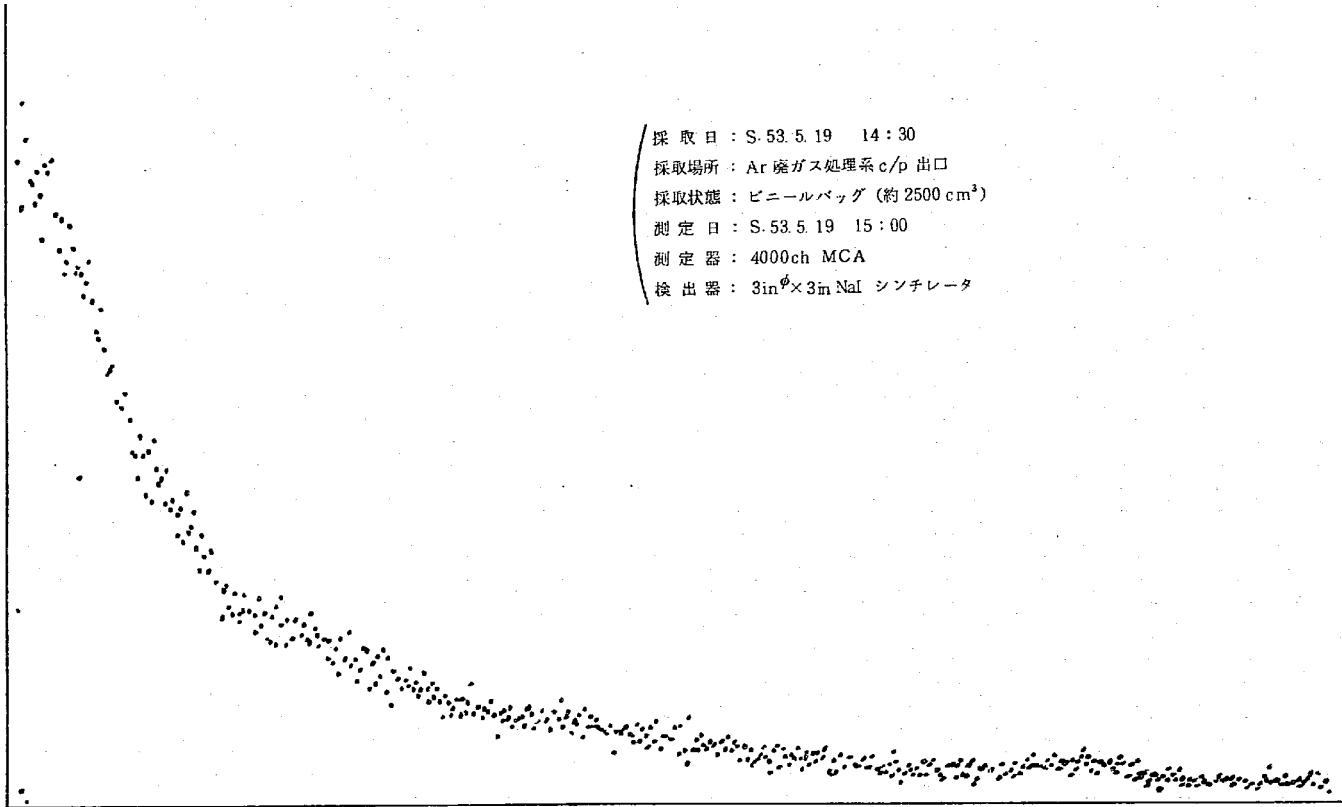


図 4.3 15 MWt 時廃ガス試料 γ 線スペクトル <Type - 2>

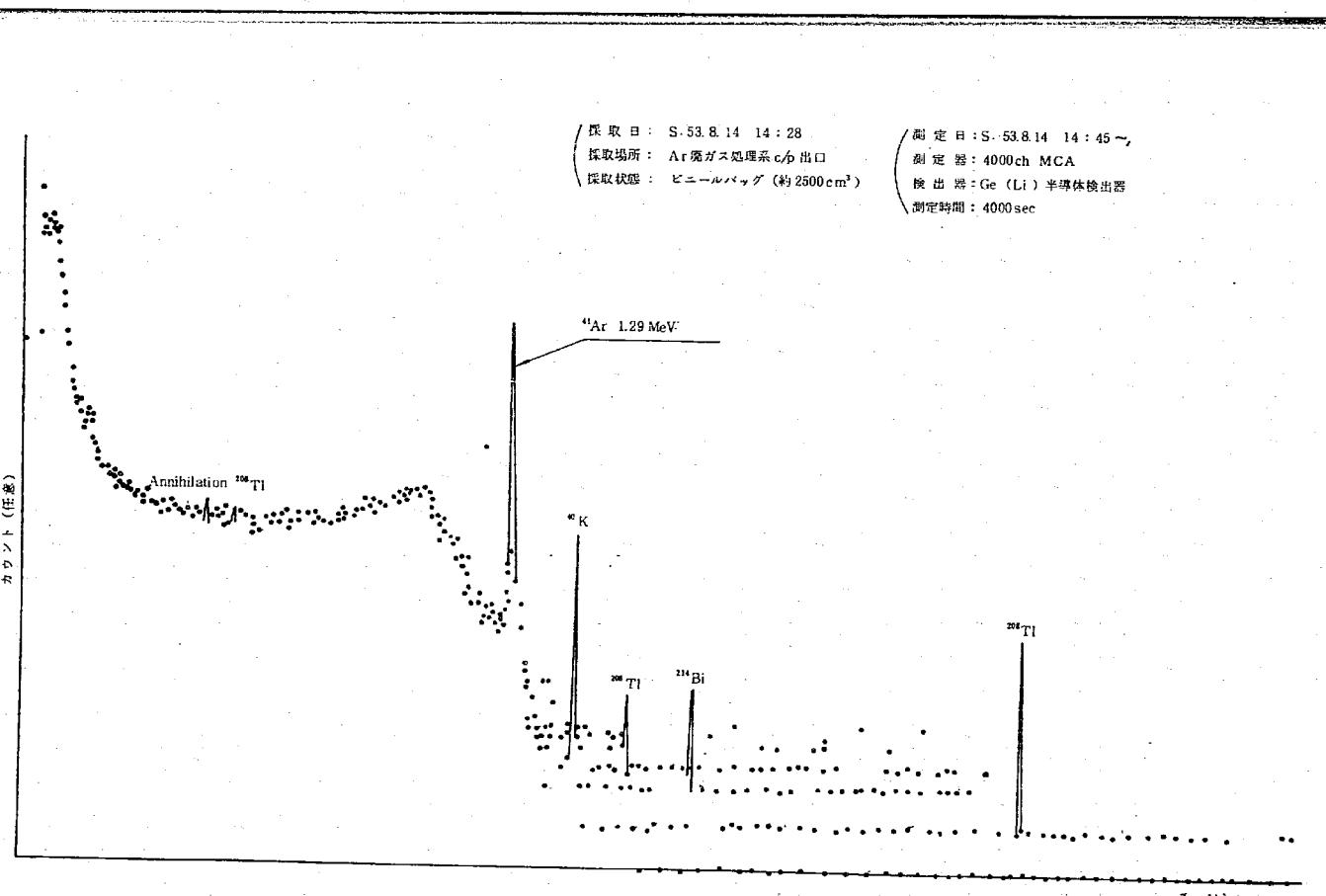
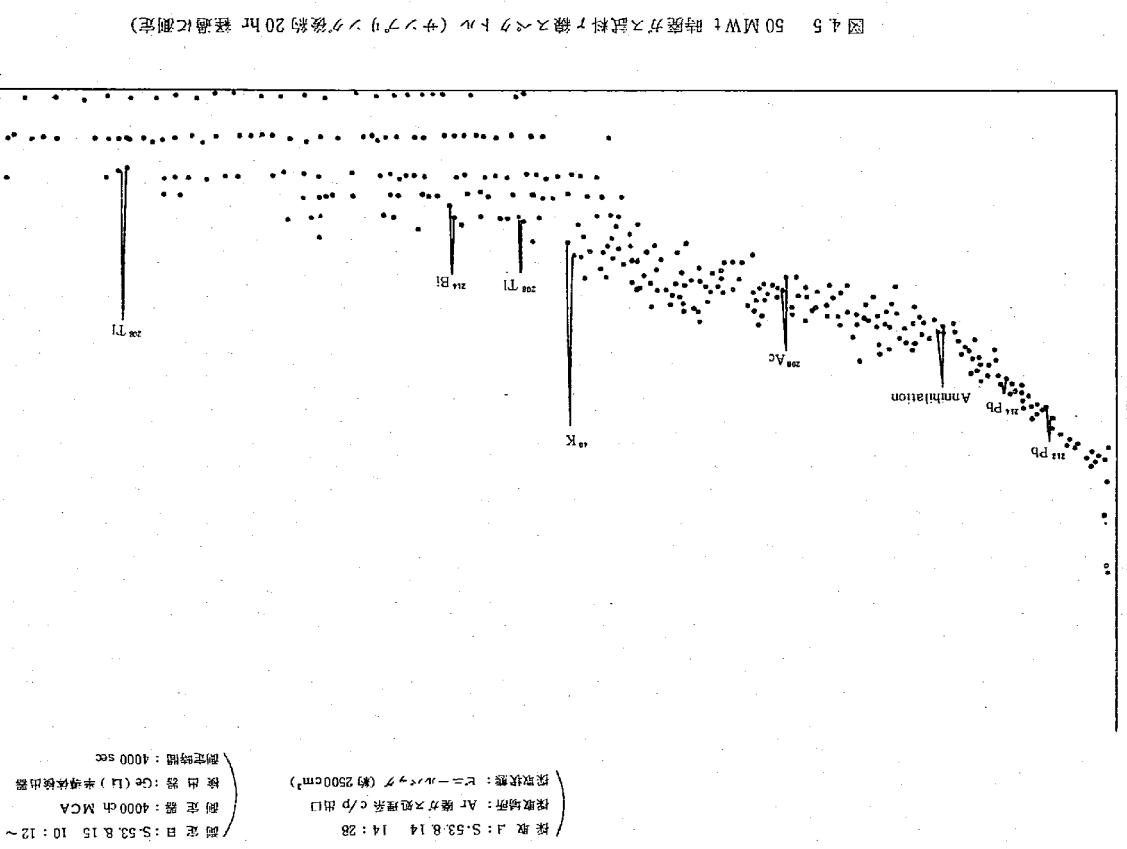


図 4.4 50 MWt 時廃ガス試料 γ 線スペクトル (サンプリング直後測定)



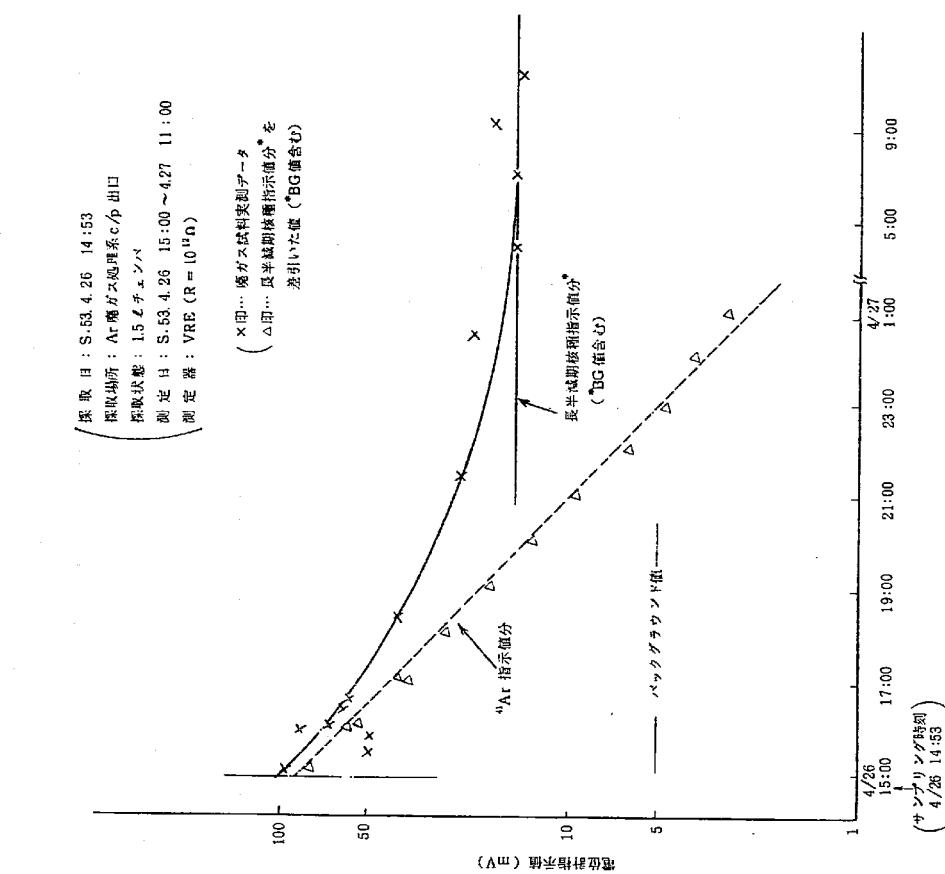


図 4.7 (9 MWT 時) 廃ガス試料試験特性<Type-b>

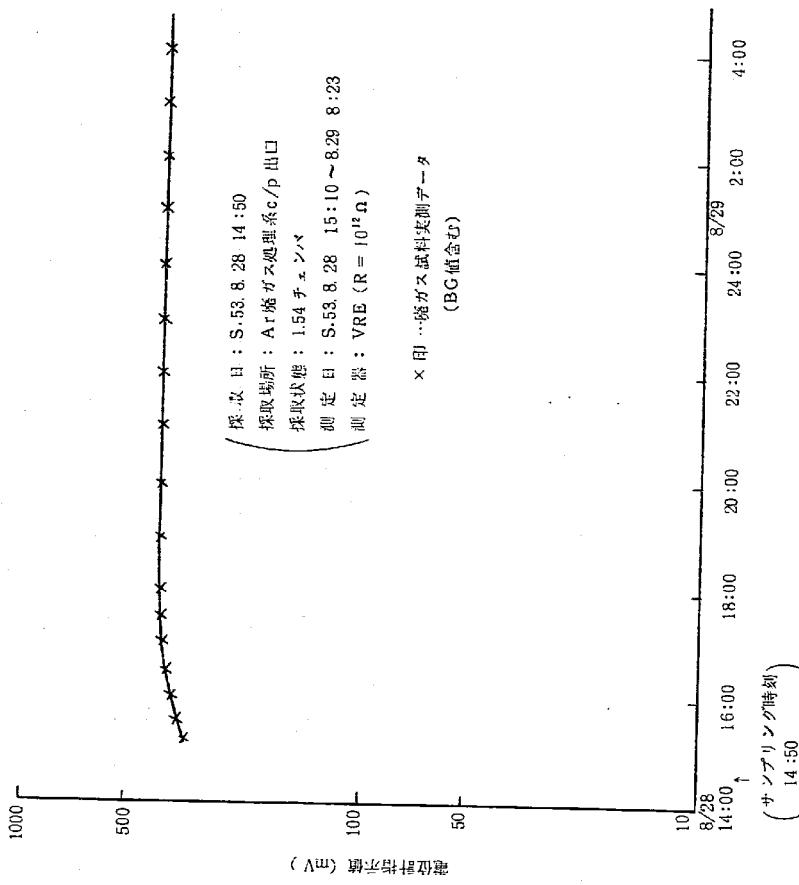


図 4.8 (燃えモード) 廃ガス試料試験特性<Type-c>

4.3. 焼ガス濃度測定

各サンプリングにおけるVREによるデータと、4.2の結果とともに焼ガス試料の濃度を計算した結果を表4.4にまとめた。

1.5チャンネルに封入した焼ガス試料をVREで長時間測定して減衰しなかった指示値分、すなはち長半減期核種による距離電流分を濃度に換算する場合、3.2-(2)-(1)で示したように一般β線放出核種と³Hとでは換算係数が異なるので、表ではNa分析室の分析結果(表4.5、欄外参照)を参考に、試料中の長半減期核種を³Hのみと想定して(3-5)式により濃度を算出した。この場合、一般的のβ線放出核種として濃度を計算するのに比べ、約7倍の過大計算となる。

参考値として6/26、7/3の焼ガス試料の核種別濃度を、分析結果とVREの測定データから算出すると次のようになる。

注-6) 1.5チャンネルに封入した焼ガス試料は、組分が相当低く、既設附での分析方法(³Hの捕集方法)では十分に³Hが捕集されないことが予想される。従って、分析結果を得られた³Hの濃度($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)は、過小評価になつていると判断されるので、以下の計算結果は、参考値として取扱う。

尚、捕集方法についての検討は現在検討中である。

<核種別濃度の算出>

i) 計算式...³H以外の放射として¹⁴Cを仮定する。

焼ガス試料をVREで測定するときの放射能A(μCi)と距離電流値I(Amp)との関係式は、

$$\begin{cases} \text{一般の}\beta\text{核種について: } A_C = K_1 \times V_C \\ (\text{ここでは}\text{ }^{14}\text{C}\text{である}) & \text{ここで } K_1 = 2.4 \times 10^{11} \\ ^3\text{Hについて: } A_H = K_2 \times I_H & \text{ここで } K_2 = 1.65 \times 10^{12} \end{cases} \quad (4-1)$$

従って、濃度a($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)と電位値V(mV)との関係式は、

$$\begin{cases} ^{14}\text{C: } V_C = (a_C \times V_C / K_1) \times R \times 10^3 \\ ^3\text{H: } V_H = (a_H \times V_H / K_2) \times R \times 10^3 \end{cases} \quad (4-2)$$

ここで

$$\begin{cases} a_C, a_H: ^{14}\text{C}, ^3\text{H}\text{の放射能濃度}(\mu\text{Ci}/\text{cm}^3) \\ V_C, V_H: \text{試料ガス容積(通常 } 1500 \text{ cm}^3) \\ R: \text{測定に使用する抵抗値}(\Omega) \\ V_C, V_H: \text{電位計指示値}(mV) \end{cases}$$

ii) 計算結果

表4.3 ¹⁴Cの濃度算出結果

試料日	a_{14} ($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)	V_H (cm^3)	A_H (μCi)	V_T (mV)	V_C (mV)	a_C ($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)
6/26	1.6×10^{-6}	1379	2.2×10^{-3}	1.3	68.0	66.7
7/3	2.1×10^{-5}	1376	2.9×10^{-2}	17.6	575.0	557.4

* $a_{14} \sim A_H$ まではNa分析側における分析結果(添付データーB)より

* V_T の値はVRE測定データ、但し、圧力補正のされてない値。 $(R=10^{12} \Omega)$

表4.4 ³Hと¹⁴Cの混在比(%)

試料日	a_H/a_C	a_H/a_T	a_C/a_T	V_H/V_C	V_H/V_T	V_C/V_T
6/26	14.5	12.7	87.3	2.0	2.0	98.0
7/3	23.6	19.1	80.9	3.2	3.1	96.9

表 4.5. 腐力^a及試料濃度測定結果

プラント 状 態	採取日	測 定 結 果		備 考
		γビーコン	長半減期核種(•)	
MW1 9	4/26	△	1.7×10 ⁻⁵	1.5×10 ⁻⁵
	5/19	△	<2.0×10 ⁻⁶	3.5×10 ⁻⁶
15	5/23	—	2.8×10 ⁻⁶	
	5/24	—	1.4×10 ⁻⁵	
25	6/1	—	6.0×10 ⁻⁵	
	6/26	—	7.3×10 ⁻⁵	
40	7/3	—	1.7×10 ⁻⁵	
	7/10	—	7.5×10 ⁻⁵	分析 領
50	7/29	—	8.3×10 ⁻⁵	
	8/14	△	6.3×10 ⁻⁴	
	8/18	—	5.3×10 ⁻⁴	
燃 交 替 モード	8/28	—	4.4×10 ⁻⁴	分析 領
	—	—	4.3×10 ⁻⁴	
	—	—	1.9×10 ⁻⁴	
	—	—	1.0×10 ⁻⁴	IV
	—	—	1.1×10 ⁻⁴	
	—	—	<2.0×10 ⁻⁶	
	—	—	3.0×10 ⁻⁴	
	—	—	4.4×10 ⁻⁴	
	—	—	<2.0×10 ⁻⁶	
	—	—	4.6×10 ⁻⁴	
	—	—	4.8×10 ⁻⁴	
8/30	—	—	—	

*1: ${}^3\text{H}$ として計算した體積
(一般的のタコヤ出核率として計算する場合に比べ約7倍大きくなる。)

表 4.5 の結果を原子炉出力 (M_{Wt}) との関係で図 4.9 に示す。

参考データとして、一次カバーガスのサンプリングから得ら

$4.0 \times 10^{-3} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ を図中に示す。この値も、薩ガス同様³Hとして算出しているが、一次カバーガス系内の長半減期β線放出核種は³Hのみと予想されるので、得られている濃度の値は信頼性があると考えられる。

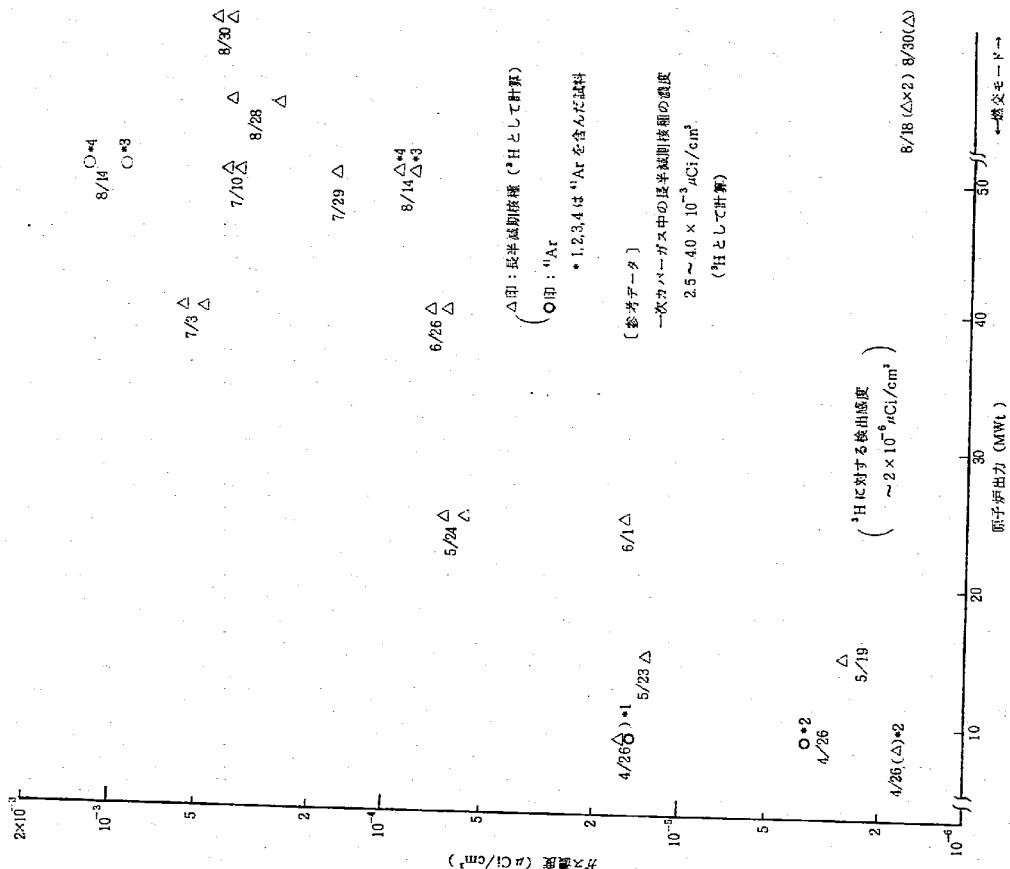


図 4.9-(1) 庭がス濾度測定結果 (S. 53. 4. 26 ~ 8. 30
原子炉最高出力 50MWt)

5. 検討

前述の4結果をまとめ、考察すると次のような。

5.1. 管理基準値について

- (1) バイバス放出時の値 $0.03 \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ に対しては、廃ガスモニタ (GM-5, 6, 7, 8) のシーケンスにより順調に管理され、露ガスサンプリングの結果も基準値以下であった。従って、一時間平均放出率 $0.33 \text{ Ci}\cdot\text{MeV}/\text{hr}$ も、設計上、満足していると思われる。確認の為、スタッガスモニタ (GM-3, 12) の指示値で放出率について考察してみると、この試験期間中、モニタの指示値が情報収集値 ($1 \times 10^{-6} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$) 以下、更には検出感度 ($6.0 \times 10^{-8} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$) 以下であったことから、以下の計算例に示すように十分管理基準値を満足していることが認められる。

<放出率の計算例-(1)>

スタッガスにおいて、ガスモニタの検出感度の濃度のガスが 1 日間連続して放出されたと仮定した場合の、1 日間平均放出率 $A (\text{Ci}\cdot\text{MeV}/\text{day})$ を計算する。

$$(1) \text{ 検出感度: } \eta = 6.0 \times 10^{-8} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3 (E_T = 1.29 \text{ MeV の場合})$$

$$(2) \text{ スタッガス流量: } F \cong 13.0 \times 10^4 \text{ m}^3/\text{hr}$$

よって、

$$\begin{aligned} A &= \eta \times (F \times 10^6) \times 1/10^6 \\ &= \{ 6.0 \times 10^{-8} \times (13.0 \times 10^4 \times 10^6) \times 1/10^6 \} \times 1.29 \\ &= (0.78 \times 10^{-2}) \times 1.29 \\ &= 0.01 \text{ Ci}\cdot\text{MeV}/\text{hr} \end{aligned}$$

故に、 $A \ll 0.33 \text{ Ci}\cdot\text{MeV}/\text{hr}$

(2) 廃ガスタンク放出については、本試験期間中、該当する状態がなかったが、計算例-(1)の結果を引用して計算し、1 日間管理目標値を十分に下まわっていることが確認される。

<放出率の算出例-(2)>

$$0.78 \times 10^{-2} \times 24 = 0.19 \text{ Ci}/\text{day} (\ll 61.5 \text{ Ci}/\text{day})$$

5.2. 基礎データについて

- (1) 廃ガス含有放射性核種として、 γ 線スペクトル、廃ガス分析などにより ^{41}Ar , ^3H が確認され、事前評価、減衰特性、廃ガス分析など諸々のデータにより ^{14}C の存在が推定される。また、 γ 線スペクトルの結果から、 ^{41}Ar 以外の γ 線放出核種、例えば FP である Kr,

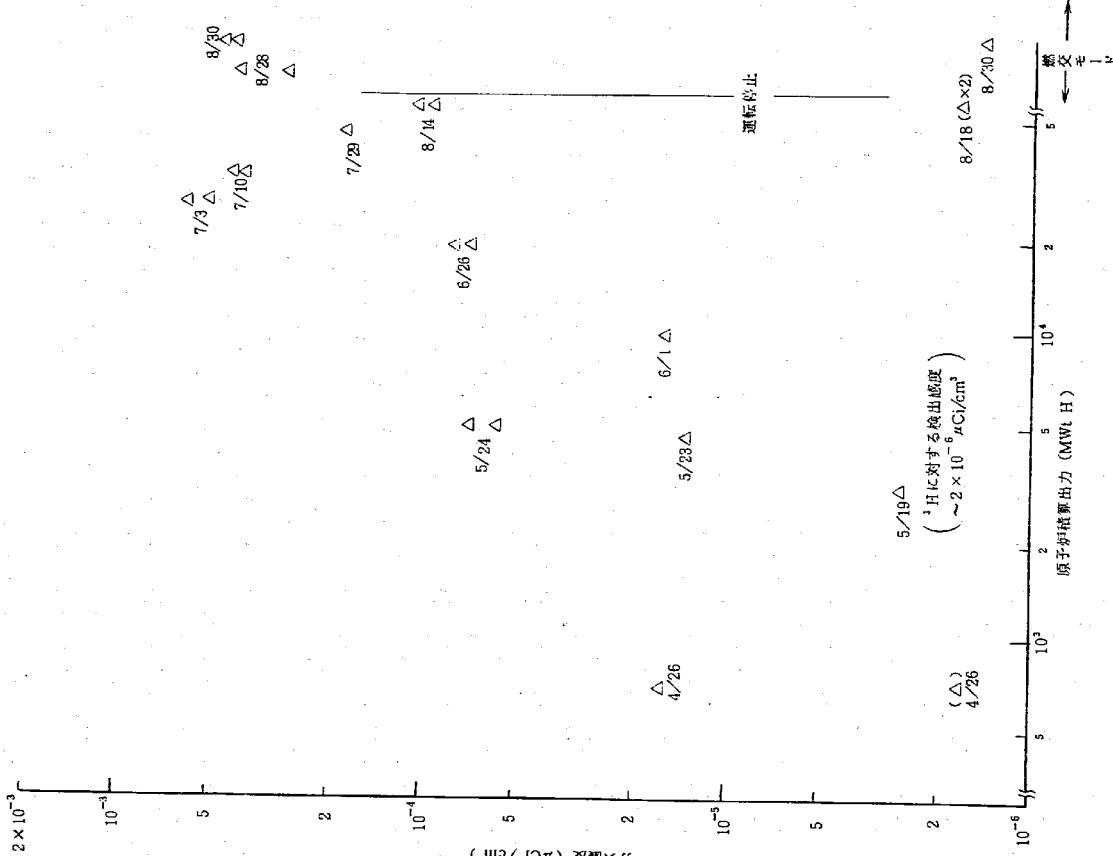


図 4.9-(2) 廃ガス濃度測定結果 (S. 53.4.26 ~ 8.30
原子炉最高出力 50 MWT)

Xe , I, 一次冷却材の放射化 Na (ベーベルとして放出される可能性あり)などの存在は無いものと思われる。

(2) 廃ガス含有の核種・濃度とプラント状態 (ex. 原子炉出力、運転モード)との関係は、試験期間中のみのデータでは不明確である。極いて云えども、廃ガスモニタの指示値の変化から、出力上昇時すなわちプラント状態が不安定なときに、廃ガス放出の傾向がみられる。

(添付データ-12), (3), (4) 参照)

(3) 5.2.(1), (2) の結果と、ガスモニタ (GM - 5, 6, 7, 8) の指示変化を解析した結果を総合的にまとめると、次のことが予想される。

1) アルゴン・廃ガス処理系に流入する廃ガスの含有放射性核種は 3H が支配的である。

(一次ガバーガスからの ^{41}Ar は、到達時間が十分に長いので減衰する。)

ii) 鑑業廃ガス処理系に流入する廃ガスの含有放射性核種は ^{41}Ar が支配的である。

従って、通常、廃ガス処理系内には $10^{-4} \sim 10^{-6} \mu Ci/cm^3$ 程度の濃度の 3H が停留していることになる。

原子炉の炉型が新しくかつ遮蔽実績が少ないことで、廃ガス放出の実態・メカニズムなどが試験前にほとんど判別できず、しかも本試験期間においても不明確であったことなどの理由により、結果に対する十分な解析を避けたが、今後は、i) プラント状態を考慮したサンプリング、ii) 測定方法の改善などを重点的に実施し、系統だった基礎的データを蓄積してゆく予定である。

i) については、50 MWe 地熱運転に廃ガス放出に関する情報・傾向を把握し、それに合致したサンプリングを実施すること、鑑業廃ガス処理系の廃ガスサンプリングを併用すること。さらにガスモニタのインターロックを解除してアルゴン系と窒素系の分離サンプリング法を採用するなどにより、一層効果的なサンプリングが実現できる。

ii) については、3. 試験方法で示した以外の可燃型廃氣式ガスマニタによる連続測定、捕集装置と液体サンプルーションカウンタによる 3H , ^{14}C の分離定性・定量分析などにより改善は実現可能で、今回不明だった点についての解析に大いに役立つと考えられる。

只、i), ii) の実施については幾つか問題があり、例えばサンプリングの為にプラントの運転状態を擾乱した場合の警告、変則的な連続サンプリング法により生ずるプラント管路・被曝管理の難易さなど、検討を要する事項であろう。

また、「常陽」全体の総合的なガス管路を成すにも、廃ガスのデータ解析の面からも、廃ガスだけでなく、廃ガスの発生源となる一次カバーガス節減、安全容器呼吸系他の放射性ガスの核種濃度・量などの測定を充実させることも、より一層必要と思われる。

以上の他に、全く解析できなかった VRE 測定の際の “グロー特性（仮称）” の問題、これは廃ガス含有核種・廃ガス濃度の結果に影響するので、注-7)以外のアプローチの方法で早急に解決しなければならない。（図 4.8 参照）

注-7) 測定系の健全性のチェック、FP の存在による銀板種の生成を既定したフィッシュティング計算による核新・濃度の推定の通りで解析したが、過剰な解釈は得られなかった。

6. 結 言

<添付データー(1)>

廃ガス試料の分析結果

1. 分析方法

1.5ℓチエンバに封入された試料がス中の³Hに満たし、凝縮法で³Hを捕集して液体シンチレーションカウンタで放射能を評価する。

2. 分析試料

採取日: S. 53. 26. 18°20', S. 53. 7. 3. 14°05' の2本

採取場所: Ar 廃ガス処理系コンプレッサ出口

採取量: 約1500 cm³ (1.5ℓチエンバに封入)

3. 分析結果

採取日	核種	濃度 ($\mu\text{Ci}/\text{cm}^3$)	量 (Nem ³)	VRE指示値 (mV)
6/26	³ H	1.6×10^{-6}	1379	68.0
7/3	³ H	2.1×10^{-5}	1376	575.0

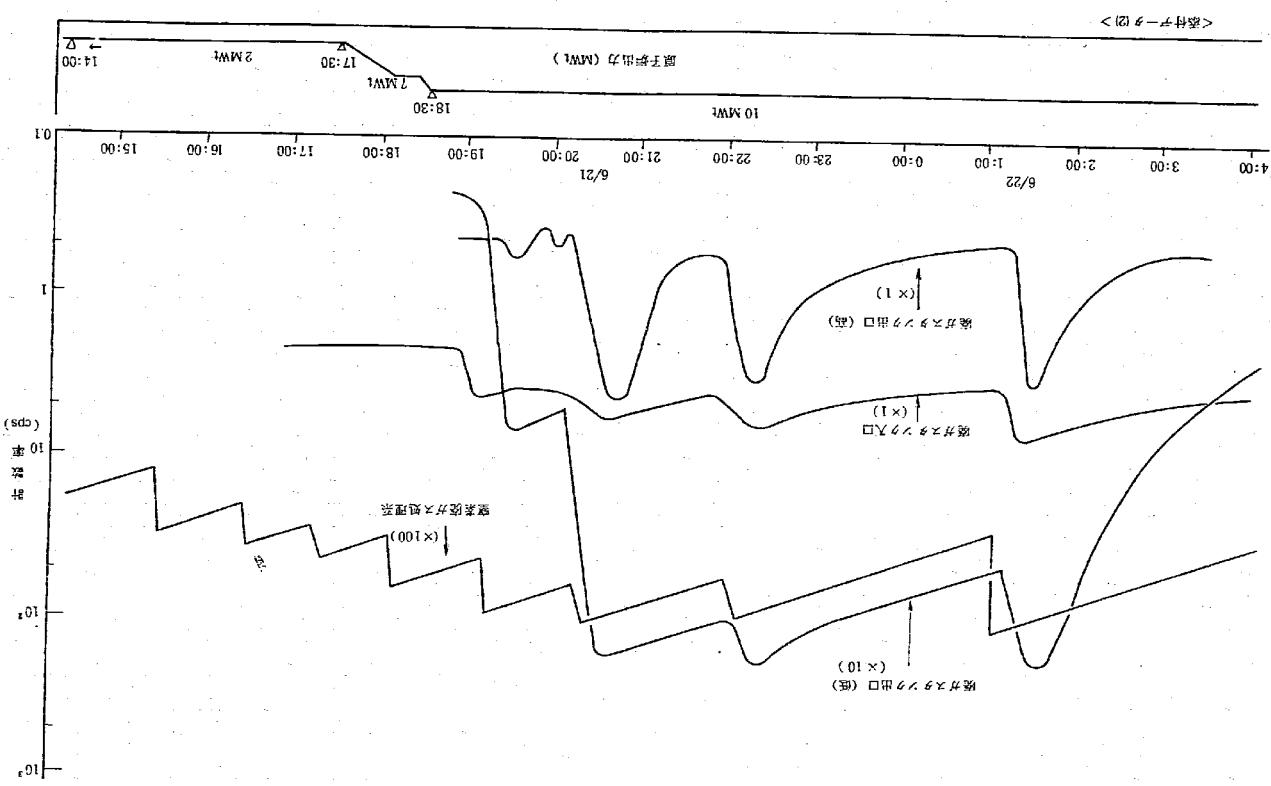
* 分析前にVREで測った値 (R = $10^{12} \Omega$ 使用)この値を³Hとして濃度に換算すると、各々次の値になる。6/26: $7.5 \times 10^{-5} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$, 7/3: $6.3 \times 10^{-4} \mu\text{Ci}/\text{cm}^3$ 

図5.1 廃ガス処理系放出元=多機能配管 (起動~2MWt~7MWt~10MWt)

<添付データー(2)>

- 30 -

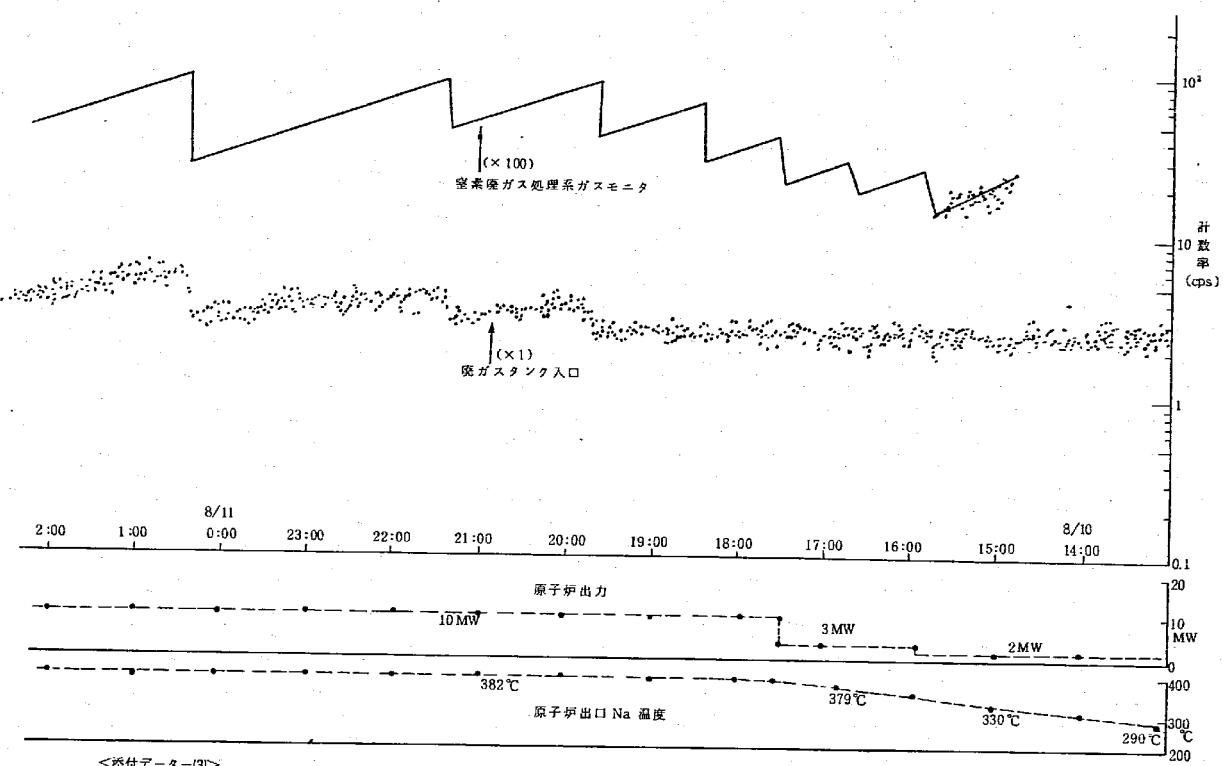


図 5.2 廃ガス処理系ガスマニタ指示値記録 (8/10 14:00 ~ 8/11 2:00
起動～2 MWt～3 MWt～10 MWt)

- 31 -

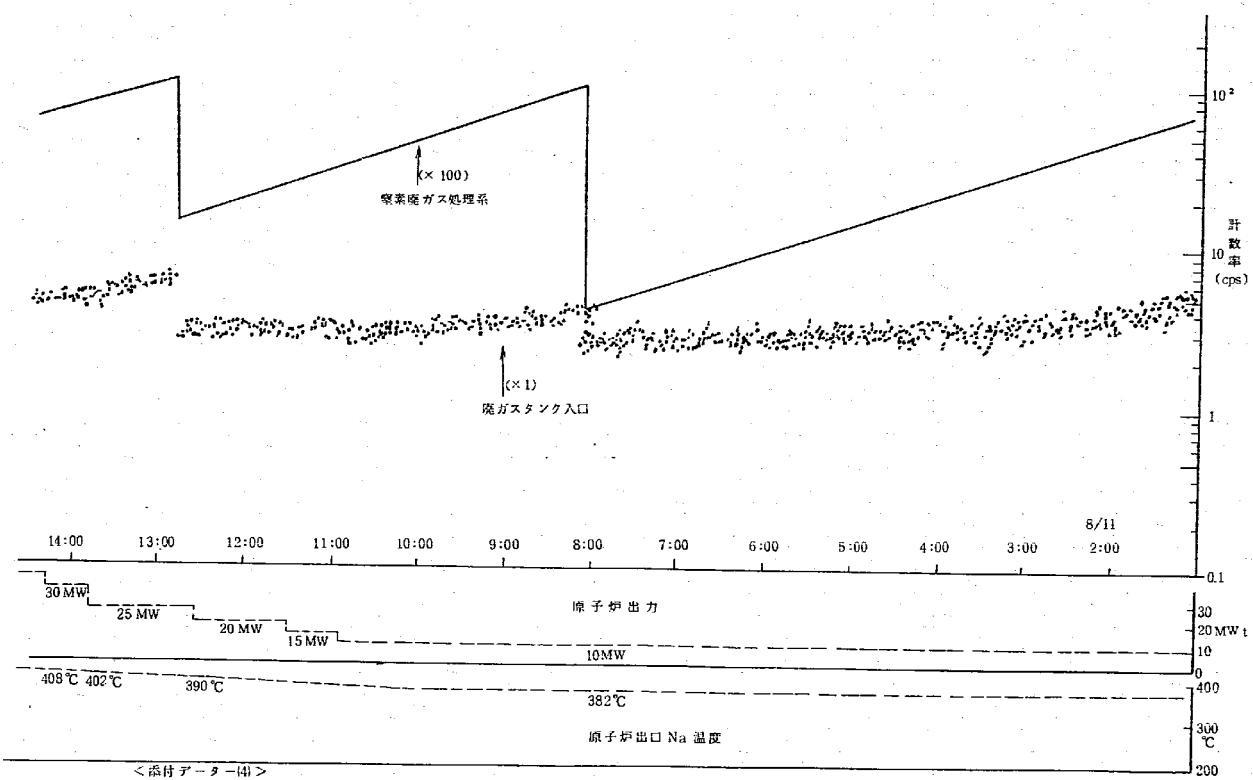


図 5.3 廃ガス処理系ガスマニタ指示値記録 (8/11 2:00 ~ 14:00
10 MWt～15. 20. 25. 40～50 MWt)

<参考資料>

1. "大洗工学センター原子炉施設保安規定" S. 52.9.1.
2. 同 上 "別冊" S. 52.9.1.
3. 同 上 "参考資料" S. 50.4.
4. "高速実験炉「晴陽」運転マニアル参考資料"
5. "放射線管理体制マニュアル" S. 53.8.